

中国残留邦人への理解を深めるシンポジウム

「福岡発、中国残留邦人と帰国者の『今』を考える」

■主催：(財)中国残留孤児援護基金

—後援：福岡県・福岡県教育委員会—

入場無料
要入場整理券

☆日時：2009年 **1月25日(日)** ☆場所：**都久志会館** 福岡市中央区天神 4-8-10
TEL. 092-741-3335

☆料金：**入場無料** (入場整理券が必要です。)

☆お問い合わせ：劇団道化 (TEL. 092-922-9738)

●第1部：公演 (14:00~15:45)

劇団道化「**吉林食堂** ~おはぎの美味しい中華料理店~」

●第2部：シンポジウム (16:00~17:30)



基調講演「**今・若い人たちに**

—私と中国残留孤児・帰国者との出会い—

大谷昭宏氏(ジャーナリスト)



**満
州
国**

**朝
鮮**



劇団道化★九州の平和シリーズ第5弾

吉林食堂

~おはぎの美味しい中華料理店~

作：篠崎省吾・中村芳子
演出：北村直樹
音楽：趙国良

作品協力：北九州市麦酒煉瓦館、帰郷(中華料理店・福岡市東区)、知味館(中華料理店・福岡市早良区)
劇団道化 太宰府市朱雀 6-3-18 <http://www.douke.co.jp>

福岡

中国残留邦人への理解を深めるシンポジウム

「福岡発、中国残留邦人と帰国者の『今』を考える」

■主催：(財)中国残留孤児援護基金

—後援：福岡県・福岡県教育委員会—

●第1部：公演 (14:00~15:45)

劇団道化「吉林食堂 ～おはぎの美味しい中華料理店～」



福岡で小さな中華料理屋を営む中国残留孤児とその二世の話。

1945年。日本の敗戦で混乱する満州・長春で、主人公の博(6才)は、母とはぐれて孤児となるが、幸い中国人の養父母に育てられ、長じてコックとして身を立てる。

1983年。「中国残留孤児帰国事業」により帰国した博は、生母・マサの住む佐賀に身を寄せたが仕事がうまくいかず、周囲の援助を受けて、福岡で小さな中華料理屋を開く……。

言葉の問題や学力差で高校進学を諦めた新一、高校受験を控えた純子。日本語や日本の習慣にいつになじまない父がいつも二人を悩ませる。彼らを励ますマサは、大きな悲しみを抱えていた。戦後の満州を生き延びるために博

の妹・さと子(2才)を見殺しにしたと思っ
込んでいるマサは、良心の呵責の中で戦後の40年を生きてきたのだ。

ある日。さと子が、彼らの前に現れる……。



友情出演
仮屋祐一
(劇団風の子九州 代表)



緒方裕子 長島宏 西雅子 西村健治 奥山美幸



作：篠崎省吾・中村芳子 / 演出：北村直樹 / 美術：森川清
音楽：趙国良 / 照明：吉次政道 / 音響：松本己記代
方言指導：佐賀子ども劇場
※この作品は、「坂の上の家」/松田正隆・作のヒントを得て創りました。

特定非営利活動法人

劇団道化

福岡県太宰府市朱雀6丁目3-18 〒818-0103
TEL.(092)922-9738 FAX.(092)922-9812
http://www.douke.co.jp/ info@douke.co.jp

(社)日本劇団協議会加盟/日本児童・青少年演劇劇団協同組合加盟/国際児童青少年演劇協会日本センター加盟

●第2部：シンポジウム (16:00~17:30)

基調講演「今・若い人たちに

—私と中国残留孤児・帰国者との出会い—
大谷昭宏氏 (ジャーナリスト)



大谷昭宏氏プロフィール

■経歴：1945年東京生まれ / 1968年早稲田大学政経学部卒・読売新聞大阪本社入社・徳島支局勤務 / 1970年大阪本社社会部勤務・警察担当 / 1972年大阪府警捜査一課担当 / 1980年朝刊社会面コラム『窓』欄担当。以後7年間にわたって『窓』欄を担当 / 1987年読売新聞社を退社後、大阪に事務所を設けてジャーナリズム活動を展開している。

■主な出演番組：テレビ朝日系列「サンデープロジェクト」(日曜10時) / テレビ朝日系列「スーパー」チャンネル(火曜・水曜16時55分) / テレビ朝日系列「やじうまプラス」(水曜16時25分) / テレビ朝日系列「スーパーモーニング」(金曜8時) / TBS系列「ピンポン!」(火曜11時) / 朝日放送「ムーブ!」(木曜15時49分)



「今・福岡で —中国残留孤児二世の私—
大塚節子氏 (九州中国帰国者支援・交流センター勤務)

「今・皆さんにお話したい事」
木村琴江氏 (九州地区中国残留孤児連合会会長)

「今・私たちは何を支援するのか」
名和田澄子氏 (福岡医療福祉大学 人間社会福祉学部 准教授)

中国残留邦人のことを知ってください。

息子は日本敗戦の二ヶ月後、食べる物も無く、痩せかけて、やっと辿り着いた長春の街で死んだ。息子はたった一歳八ヶ月で逝ってしまった。「おふう、ちょうだい」のひとつと、痩せさらばえて軽くなった身体だけを残して、息子は死んだ。私は一晩中抱きかかえていたが、息子は硬くなってしまった。私は涙も出なかった。これでいつでも死ぬことができると、安らぎさえ感じていた。(山村文子著「忘れがたく」から)

63年前、中国の東北地方(当時「満州」と言われていた地方)では、突然のソ連参戦により、多くの日本人が混乱のうちに避難することになりました。極限状態の中、親と別れ中国人に育てられた人たち、中国に生活の場を見いだした人たち、これらの方々が中国残留邦人と呼ばれる人たちです。

1972年の日中国交正常化の後、多くの中国残留邦人が帰国しました。帰国した中国残留邦人の方々は、生活基盤を築こうと懸命の努力を続けていますが、長年の中国における生活が日本における適応を難しくしています。少なくない方々が、言葉の壁、文化の壁に戸惑い、悩んでいます。

(財)中国残留孤児援護基金では、戦争を知らない世代の方を含む多くの国民の皆様方に、こうした中国残留邦人の問題について少しでも知っていただこうと、この催しを開くことといたしました。この催しが、中国残留邦人の方々が抱える様々な困難を解決する一助となることを願っております。

財団法人 中国残留孤児援護基金

本公演に関する問い合わせは 劇団道化 TEL.092-922-9738 へどうぞ。

本事業は、厚生労働省の委託を受けて行われます。



財団法人中国残留孤児援護基金

東京都港区虎ノ門1丁目5番8号 オフィス虎ノ門1ビル 〒105-0001
TEL.03-3501-1050 (代) FAX.03-3501-1026
http://www.engokikin.or.jp/ mail:info@engokikin.or.jp